

# この冊



## 「健康格差社会」を生き抜く

近藤 克則 著

朝日新書 本体780円+税

第3部「健康格差社会」を生き抜くために」では、生活習慣の改善や運動など個人の健康維持努力も必要であるが、それによる健康格差の縮小や健康指標の改善には限界があり、長期的な視点に立った「well-being（幸福・健康）」な社会を目指した広範囲の社会政策が必要であると主張する。

なお、格差容認のアメリカ型の社会は必ずしも個々人のwell-beingにつながらず、「大きくても効率的なパブリック」を目指す「第3の道」が提案されている（223頁）。

幸福度調査などによると、人々の幸福感を決める要因として健康は首位に挙げられている。したがって、本書の問題提起と視点はきわめて今日のかつ重要である。もちろん、どのような社会においても健康格差を完全になくすことはできないが、社会政策的にどのような社会を構想するかは価値観と選択の問題である、というのが本書の主旨だろう。

戦後、平等神話が広く信仰されてきた日本で、格差問題が指摘されはじめて早くも10年以上が経った。グローバル化の進展や小泉構造改革などを背景に、

格差問題は21世紀最初の10年の日本を特徴づけるキーワードとなった。

その間、格差をめぐる議論は非正規労働者の問題や社会的排除などへとその射程を広げていったが、経済的格差（およびその原因または結果としての教育格差や、やる気の格差）が主な焦点であったことは大きく変わっていない。そのなかで「健康格差」というもう一つの格差にフォーカスした本書は、今までの格差議論に新しい風を吹き込むだけでなく、社会政策と医

学を架橋する「社会疫学」という新しいアプローチを通じて、社会や健康に対する我々の考え方の革新を促すものである。

本書の第1部「健康格差社会」の現実」では、統計学的にみた場合、人々の健康はその経済的地位と関連していることを、「確固たる事実」として紹介する。例えば、経済的社会的地位の高い「お金持ち」の高

齢者は、明るく健康的な生活を送っている人が多く、そのため、うつや要介護状態になる確率が低い。とりわけ男性の場合は死亡率に3倍以上の差があるという（25頁）。

第2部「健康格差社会」発生のメカニズム」では、なぜ豊かな社会でもこれだけの健康格差

が生まれるのかという問いに対し、個人の生活習慣や家庭環境、職場、遺伝など様々な側面から考察し、健康を捉える新しいパラダイム「社会疫学」を提唱する。著者によれば、社会疫学とは、「健康の社会的決定要因」の分布や、それらが健康に影響を及ぼす経路、そして影響の大きさを明らかにする科学である（115頁）。

このようなアプローチに立脚すれば、健康は個人の生活様式や努力だけでは説明できず、様々な経路を介して社会的環境の影響を受けることが分かる。

なお、格差の大きい社会、ソーシャル・キャピタルの乏しい分断社会は、低所得の人だけでなく高所得の人々の健康をも害す